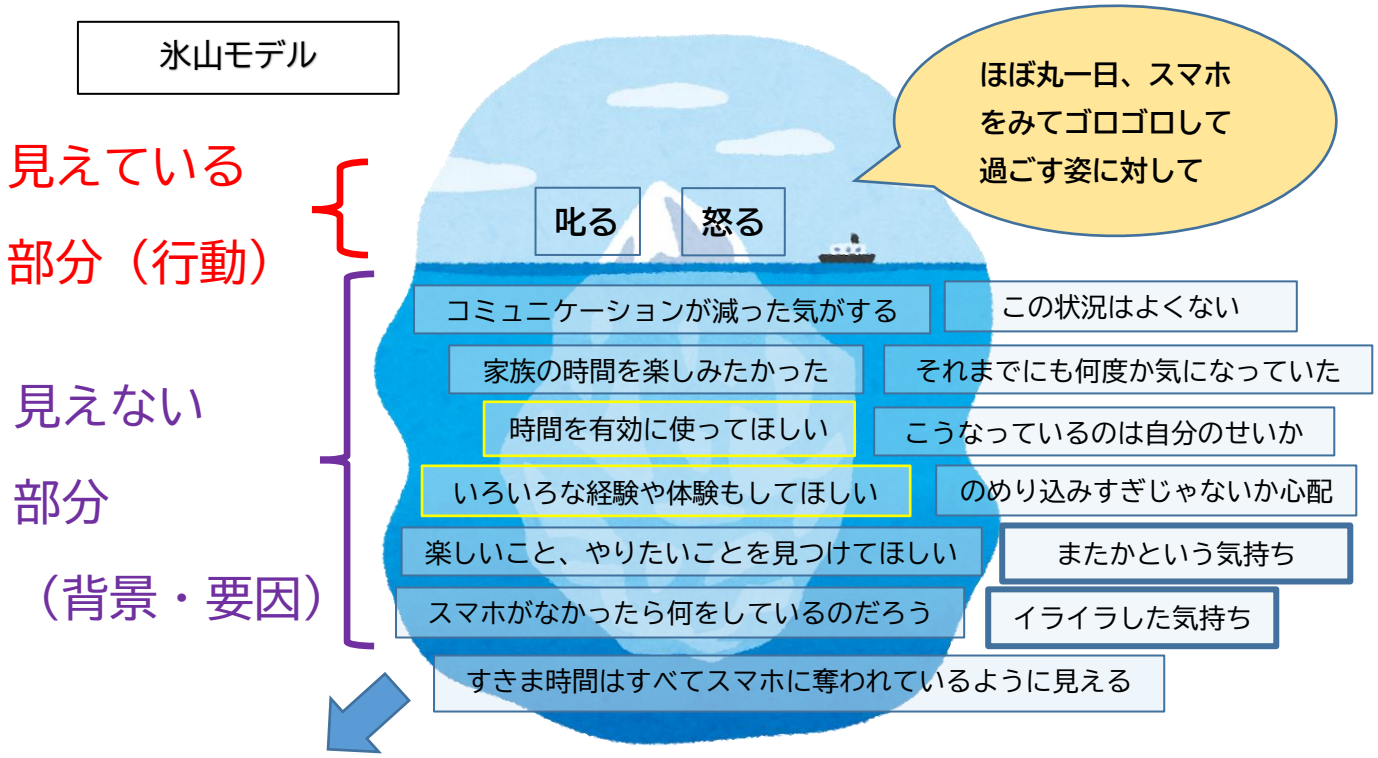
教育相談だより

令和５年10月４日発行
福島県特別支援教育センター
作成：教育相談係

子どもの頃、「怒られるのも愛情の裏返し」「叱られるうちが華」などよく言われたものでした。教育相談では、子どものよい所をたくさん見つけながら、「ほめて伸ばす」ことを大切に、子どもたちとかかわっています。しかし、生活の中で叱りたくなる場面や怒りたくなる場面も多いのではないでしょうか。本センターでは、子どもたちの理解の際に「氷山モデル」で行動の背景・要因を考えることを大切にしています。今回は、自分が子ども（娘）を叱ってしまった場面で考えてみたいと思います。

＜氷山モデルによる行動理解＞　例：相談担当者の自宅にて、わが子を叱った、怒った行動について
目に見える行動は、「叱る」「怒る」　／　目に見えない、その行動の背景・要因とは？



伝わったこと
「またかという気持ち」
「イライラした気持ち」

伝えたかったこと
「時間を有効に使ってほしい」
「たくさんの経験や体験をして成長してほしい」

＜やってみた感想＞

このように書き出してみると、伝えたかったこと、「自分の時間を有効に使ってほしい」「たくさんの経験や体験をして成長していってほしい」に対して、実際に伝わったのは、「またかという気持ち」と「イライラした気持ち」という一方的な親の感情や考えであったと気づき、反省しました。今の姿を否定することが中心となり、本来、伝えたいことや、本人にも考えてほしいことを全く伝えられずに、私は「怒った」こと、子どもは「怒られた」ことが事実として残りました。

行動には、理由があります。自分が子どもを感情的に叱ってしまった場面を振り返ると、「なぜ」「何のために」自分はその行動を選択したのか、客観的に捉えることができるのではないでしょうか。

発信する時は、本当に相手に伝えたいことを（この方法で）伝えられているか、受信する時は相手の真意を理解できているかにも注意したいと改めて思いました。思いをぶつけるのではなく、伝えること、伝え合うことを子どもたちとかかわる際には大切にしていきたいですね。